

書 評

中村 恭一 著

「胃癌の病理」

—微小癌と組織発生—

愛知県がんセンター研究所
第一病理部長

長 与 健 夫

中村恭一君は癌研病理部に奉職する中堅パソログストで、ここ10年近く胃癌の病理組織とくに組織発生の問題に没頭してこられた。

昔から胃癌の病理組織に専心してきた病理学者は少なくなかったが、いかにせん当時は対象とする材料の殆んどが進行癌か末期癌であったために、癌と非癌粘膜の組織形態の間の断絶が余りにも大きく、その間に橋をかける術がなかった。戦後胃癌の早期発見や早期治療の面での進歩は著しく、就中X線二重造影法や内視鏡検査法により胃癌の初期の姿を目の前にすることが可能になった。このことは臨床医学の一大成果であるばかりでなく、病理学者が多年夢見ていたもろもろの断絶を埋めるに願ってもない好機会を提供することとなった。

切除胃の検索に当る病理学者はこの好材料を得て欣喜雀躍した。かく

申す著者もその一人で、先人の踏み込み得なかった花園に立入って、みるものの一つ一つに大きな喜びと驚きとを覚えたものだった。しかしこの花園から何を得心かが、中に入ったものの権利であると共に義務もあった。中村君がこの花園に入ったのはさして早くではなかったと思う。おそらくは彼が目にし手にしたものはその殆んどを先人が経験していたであろう。しかし彼は咲き乱れる一つ一つの花にのみ捉われずその背景をなす花園の全体を捉えようと努力した。努力したというよりは個個の花を正確にみてゆくうちに、知らず知らずのうちに花園の自然性、法則性に魅かれるようになったといったほうが真に近いかもしれない。

この本は12章に分かれているが、その骨子は著者自身がいつているように第6, 7, 8章にあたる微小癌とその組織発生であろう。癌組織と非

癌粘膜との形態上の断絶を埋めるにこれほど好個の材料はなく、この点を明らかにするのは現在の形態学の到達し得る極限といってもよいであろう。勿論このような微小癌は現在の高い臨床水準からしても術前診断は至難であり、切除胃の全割標本の作製鏡検という地味な苦勞、努力がなくては得られぬものであることもこの本をよく読まれれば気付かれることと思う。

胃に限らずどの臓器でも癌の組織像は多種多様であるといわれている。誠にその通りである。しかしその多様性の由って来たる理由を組織学的レベルでこれほど精密、丹念に調べ上げた研究は他の臓器でないし、また彼ほど執念を燃やして追いつづけた人を私は知らない。殆んど各ページに亘って鮮明な組織写真をのせ、また簡明な図表を使って彼の理論を展開してゆく点も、分担執筆の本では得られない筋の通ったものになっている。

胃の病理とくに早期胃癌の病理組織に興味と関心をもつ学生諸君や若い研究者、さらに専門医や病理医にもぜひおすすめしたい本である。

p. 288 図 445 表 67
¥ 7,000 1972 金芳堂刊